

エッセイスト 近藤 節夫



「嘆きの壁」手前の女性たちが男の様子を覗き見している

イスラム原理主義組織「ハマス」とイスラエル軍が戦闘状態のパレスチナ・ガザ地区に、今世界中から厳しい目が注がれている。そのイスラエルのエルサレム旧市街の城壁に囲まれた一画、東エルサレム地区には、世界文化遺産と認められた歴史的な価値の高いいくつかの遺跡がある。

パレスチナでは、1948年ユダヤ人国家・イスラエルの建国以前からユダヤ人とパレスチナ人・アラブ人が激しく対立し、それが今日まで延々と続いている。エルサレムには約3千年前から多様な民族が住み、今では世界3大宗教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地とされ、世界中からそれぞれの信徒のみならず、多くの観光客が訪れている。

しかし、今なお紛争が繰り返され、1967年第3次中東戦争により、イスラエルが奪回した東エルサレム地区には、僅か1kmにも満たない狭いスペースに3大宗教のユダヤ、イスラム、キリスト教信徒と、アルメニア民族がそれぞれほぼ4等分された地域に分かれて住んでいる。

ユダヤ教信徒は何はさておき、まず訪れるのが第3次中東戦争によりヨルダンから奪い返した「嘆きの壁」で、今に残る象徴的な聖地である。この神聖な場所へ入場する際は観光客でもユダヤ教男子信徒が被るキッパを頭に載せて壁に手をつき神に祈る。ここには男女の仕切りがあるが、女性が男子の祈る姿を隣から覗き見ている姿が些か奇異に見える。

キリスト教信徒は、エルサレムの南10kmのヨルダン川西岸南部にあって、一時イスラエルに占領されたが、その後パレスチナ暫定自治政府に返還されたベツレヘムのイエス・キリスト誕の「聖誕教会」を訪れる。キリストが2千年前誕生した貧しかった馬小屋は、今では石造りの立派な建物の教会に変身した。

そして、キリストが十字架を背負って歩かされた狭い悲しみの道、ヴィア・ドロローサと呼ばれる狭い商店街を歩いてゴルゴダの丘へ向かい、キリストが十字架に磔にされた跡地「聖墳墓教会」で祈りを捧げる。

イスラム教には3つの聖地がある。メッカのカーバ神殿とメディナのモスク、そしてここエルサレムにある金色の「岩のドーム」である。ここでは1日5回の礼拝があり、その都度アザーンの声が外まで漏れ聞こえてくる。ドームは今ではユダヤ人も祈る権利を求めており、この先の伝統的な存続が危惧されている。

現在のパレスチナ紛争の根底には、平素よりユダヤ人の感情にアラブ人を畏怖する気持ちがあることが影響している。西の地中海を除き、周囲の北東南方面はすべてアラブ諸国に取り囲まれ息詰まるような立地と環境に日ごろより強い圧迫感を感じている。常にユダヤ人はアラブ人に襲われるプレッシャーと恐怖に怯え、いつ暴発するか分からない事態に常に心の準備をしているのである。

大切なことは、これほど貴重な世界的宗教遺跡が残されているエルサレムを、一歩間違えれば廃墟にし兼ねない争いは、何としても国際社会の力で食い止めなければならないということである。



「聖誕教会」内のキリスト誕生の場所(元は馬小屋)



ゴルゴダの丘へ続くヴィア・ドロローサ通り



「聖墳墓教会」で行われたミサ



キリストが磔にされた跡地「聖墳墓教会」



4つのブロックに分かれた東エルサレム
(この地図はWikipediaより引用)